第109回 三方限古典塾（'15,11,19）
洪　自誠（1561～1616）「菜根譚」（その３－26）

1　冷より熱を視て、然る後に熱処の奔馳の益無きことを知る。冗より閒に入りて、然る後に閒中の滋味の最も長きことを覚ゆ。　後集 16

（意訳）　冷静な状態に立ち返ってから、熱狂して奔走していた当時を振り返ってみると、そこではじめてそのことはいかに空しく無益であったことかが分かる。

心の安まる暇もないゴタゴタした状態から、一度でも閑静な時をもてるようになると、閑静な境地の中に、芳醇なすばらしい味わいがあることが分かる。

（余説）　これは４００年程昔の論調ですが、わが国で５０年余り前に起きた「６０年安保闘争」や「東大安田講堂事件」の熱狂を思い出します。先月の「照顧脚下」（時世に流されずに自己の足下を凝視し、己の本来在るべき姿を考えよ）も同様でしょうか。

また、自分の姿を第三者の異なる視点で見てみることも示唆しています。一つの見方に自己を限定すると見える世界は狭くなり、その本質に迫ることはできません。生を考えるには死を見つめることによって実感でき、光の明るさを表現するには影を描く必要があります。善と悪、繁忙と閑暇、平和と戦争の関係も同じではないでしょうか。

2　富貴を浮雲とするの風有り。而れども必ずしも岩棲穴処せず。泉石を膏肓とするの癖無し。而れども常に自ら酒に酔い詩に耽る。

競逐は人に聴するも、而も尽くは酔うを嫌わず。恬淡は己に適うも、而も独りにては醒むるを誇らず。此れ釈氏の所謂、法に纏ぜられず、空に纏ぜられず、身と心の両つながら自在なるものなり。　後集 17

（意訳）　富貴を浮雲のごとく儚いとする気風が世俗にはあるが、必ずしも深山岩穴に隠れ住むことはない。病的なまで山水に凝る癖はないが、常に酒に酔い詩に耽る風流心はある。

人と争い名利を求めるのは他人に任せるが、世の人が名利に酔っているのを全て嫌うというのでもない。心静かに無欲でいることは自分の意にかなっているが、人が熱狂する中にあって、自分だけが冷静でいることを誇るようなことはしない。

このような人こそが、仏教における「全ては実体がある」とする考えや、「全ては実体がなく空虚である」とする考えに束縛されない、心身共に自由自在な人であろう。

（余説）　物事に固執しこだわる心が、楽に生きることの邪魔をします。自分自身で制限して、余裕を奪ってしまうことになります。何事にもこだわらずに孤立や極端を避けて、常に「中道を行く」ことが、この世を広く自由自在に生きることになります。

作家・劇作家の福田恆存は「保守とは何か」（文春学術ﾗｲﾌﾞﾗﾘｰ）で「真理は究極において一元に帰一することがない。あらゆる事象の本質に、矛盾対立して永遠に平行のままで存在する二元を見る」と書いています。ことわざには矛盾対立するものが数多くあることからもこのことは納得できます。

（参考）論語・述而「子曰く、疎食を飯い水を飲み、肱を曲げて之を枕とす。楽しみ亦其の中に有り。不義にして富み且つ貴きは、我に於て浮雲の如しと」

3　延促は一念に由り、寛窄は之を寸心に係く。故に、機の間なる者は、一日も千古より遙かに、意の広き者は、斗室も寛きこと両間の若し。　後集 18

（意訳）　年月や時間は、その人の考え方しだいで長くも短くもなる。世間や場所は、その人の気持ちの持ち方しだいで広くも狭くもなる。

だから、心がゆったりしている者には一日が千年よりはるかに長いと感じ、心が広い者にはごく狭い部屋でも天地の間のように広いと感じられる。

（余説）　何事も「心の有り方次第」ということは、前段とも共通するところがあります。

時間や空間だけでなく、貧富の感じ方もその人が何と比較するかに左右されます。世界にはそれを比較する対象すら存在しない国も多いのが現実です。日本では、格差が拡大していると聞きますが、果たしてそうでしょうか。過去のや現在の状況を考えると、わたしにはそのようには見えません。一方では、世間を眺め歴史を考えると、平等で格差のない社会など存在したことなど、どこにもないのも厳然たる真実だと感じます。

（参考）荘子・逍遙遊篇「朝菌は晦朔を知らず。蟪蛄は春秋を知らず」

4　都て眼前に来たるの事は、足るを知る者には仙境にして、足るを知らざる者には凡境なり。総て世上に出ずるの因は、善く用いる者には生機にして、善く用いざる者には殺機なり。　後集 20

（意訳）　目の前に起こってくる現実のすべての問題は、足ることを知っている者には仙人が住むという理想郷に見えるが、足るを知らない者には欲望に満ちた凡俗の世界である。

世の中を動かしているあらゆる事柄は、その本来の姿を理解して、それをよく用いる者にとっては、万物を生かす働きをするが、本来の姿を理解できずに、それを善用できない者にとっては、万物を殺す働きをすることになる。

（余説）　現状に満足せず「もっと、もっと」と改善向上をめざして文明が発達し、生活の質が向上したようにも見えます。一方、人々を限りない欲望に駆り立て、不満感をあおり不安感を募らせて、不幸にした面があるのも事実です。わが国には「自分の身の丈を考え、低く暮らし高く思う」生き方と高尚とする、時代を超えた生活原理があります。

後半の、世の中を動かす事柄に「自然」と「歴史」もあります。福田恆存は「自然そのものに向きあい自然から直接学ぶことは、最高の教育技術である」と書いています。この一節の「自然」を「歴史」を入れ替えても、成立するように思われますがいかがでしょうか

（参考）老子第46章「禍は足るを知らざるより大なるはなく、咎は得るを欲するより大なるはなし。故に足るを知らば常に足る。」

礼記「学びて然る後に足らざるを知り、教えて然る後に（足らざるの）苦しむを知る」

仏遺教経「若し諸々の苦悩を脱せんと欲さば、当に知足を観ずべし。知足の法は、即ち是れ富楽安穏の処なり」

佐藤一斎・言志晩録 202「人各分有り。当に足るを知るべし。」

源信・往生要集「足ることを知らば貧といえども富と名づくべし。財ありとも欲多ければこれを貧と名づく」